

# 『六即私記』・『当家要伝』調査報告

株橋 祐史

このたび「法華宗全書 日隆3」において、『六即私記』と『当家要伝』を翻印することとなった。このため、平島盛龍主任（当時）とともに、大本山本興寺小西日遠猥下のご厚意を得て、初めてこれらの真蹟本について詳細な調査を行った。

・調査日時 平成二八年九月二日午前一〇時より一二時二〇分

・場所 大本山本興寺大書院

・調査員 株橋祐史、平島盛龍

・本山側立会 小西日遠猥下（名替所員）、三浦和浩上人

## 一、『六即私記』

- 1 通称 六即私記といわれているが、外題の『六即私記』は他筆である。
- 2 内題 三巻各軸の内題は以下のごとくである。

①六即下

②理即下、名字即下

③観行即下、相似即下、分真即下、究竟即下

と隆師の筆で書かれてあり、「六即私記」の題名は見えない。

3 異称 なし

4 形態 卷子本である。ほとんどの場合、一紙左右の端の上・中・下いずれかに継目を合わせるための文字

あるいは記号が書かれており、次紙と文字・記号の符合するものが二八箇所において確認できる。又

中央に折目と思われるものがある箇所もあるが、ほとんどにおいて折目を勘案して書かれた形跡は

ない。

5 巻数と調卷

これについて故株橋日涌先生は、

今本抄三巻の内容を明かせば、上巻は六即についての総釈、中巻は六即中の理即・名字即を、下巻は観行即已下の四即を釈している。<sup>①</sup>

と指摘し巻数と調卷の次第を示している。実際刊本の「皆久問題資料集」第五巻<sup>②</sup>あるいは「門祖日隆聖人

御聖教」<sup>③</sup>所収の「六即私記」においてもこのようになっていいる。これらから古来より「上巻は六即につい

ての総釈、中巻は六即中の理即・名字即、下巻は観行即已下の四即」とされてきた。しかし、今真蹟本の

外題は他筆にて、

①六即私記 三巻之内 総釈

②六即私記 三卷之内 理即名字即

③六即私記 三卷之内 観行即已下四即

となつていて調卷の次第は示していない。また、①「総釈」は前述の内題の「六即の下」に相当し、②「理即名字即」は、内題の「理即下、名字即下」に、③「観行即已下四即」は、内題の「観行即下、相似即下、分真即下、究竟即下」それぞれに相当している。真蹟本各軸の端裏には、

①「六即私記 三卷之内 総釈」には、

奉寄進御聖教軸表紙二卷之内

施主大坂大津与市右衛門

②「六即私記 三卷之内 理即名字即」には、

奉寄進御聖教軸表紙二卷之内

施主大坂大津与市右衛門

③「六即私記 三卷之内 観行即已下四即」には、

奉寄進御聖教軸表紙一卷

施主大坂菅菜屋太右衛門母儀

とある。これらから、貞享三年日頭師による三巻の修覆時には二名の施主が確認でき、この内①総釈（六即下）と②理即名字即（理即下、名字即下）との二巻の施主が一人であるということが確認できる。さらにこの時点では、少なくとも内題の「六即下」部分はその内容から「総釈」であると認識されていたことも注意しておきたい。

「六即私記」・「当家要伝」調査報告（株橋祐史）

6 著作年 著作年は不明であるが、前出の「桂林学叢」四号四八頁には、「総釈」の「止観依迹門事」の部分を引用して「四帖抄、名目見聞一〇巻より後、弘経抄以前」と推定されている。

7 真蹟存否 真蹟存

8 法量

「大本山本興寺 寺宝目録」（二五頁）によれば、「二六・〇×四五八」となっているが、今回調査によれば次のようである。

①「総釈」

全体 二六・〇×四七八・四

本紙 二五・〇×四七八・四

②「理即名字即」

全体 二六・〇×一一六〇

本紙 二五・二×一一四三

③「観行即已下四即」

全体 二六・四×八五六・六

本紙 二五・四×八三九・六

9 紙数と一紙あたりの行数

①「総釈」

・紙数 全一五紙

・行数 五〇二〇行

②「理即名字即」

・紙数 三七紙

・行数 四〇二〇行

③「觀行即已下四即」

・紙数 二六紙

・行数 四〇一七行

10 紙背文字 二箇所あり。すべて隆師筆。

①「理即名字即」第五紙

止五云止是仏母止是仏父亦即父即母云々

弘五云止是仏母等者（以上見せ消ち）

弘受之云実母権父共生仏子父母相即即浄名経意也

②「觀行即已下四即」第一紙

三病患境下 止八云得一大車例前可知云々云へり 弘云次大車譬

四業境下 止云直至道場余如上説云々云へり 妙楽不釈之

五魔事境下 止云直至道場云々 弘云此十法後亦応以大車譬 文無者略云直至道場

云々

止九 六禅定境下 四一開合二因縁三発相十文 第八下 釈十乘下 止云是名乘

「六即私記」・「当家要伝」調査報告（株橋祐史）

是宝乘 弘二ハ不釈之 四止観下 止云得一大車遊四方直至妙覚

妙覚余皆如上説

11 貼紙 三箇所あり。すべて他筆。

①「総釈」第六紙

此所難解

六は本因妙名字即堅信にしてか、のか、体の惑を行じ観行よりは○

所詮六は名字堅信の位に先ず体の惑を行じ観行よりは用の惑を行ずと  
いう趣なり 御本のを仮名あるところ少し上下せるか

とあつて「皆久問題資料集」第五卷一三四頁欄外にも所収されている。

②「理即名字即」第七紙

不退位也 不の字脱せり

臨時の御失念

③「理即名字即」第三三紙。

更当分力文 所作更非当分力一顯

12 内容

株橋日涌先生は前出の「桂林学叢」四号四八頁にて、

本抄は天台大師が創立された法華円教の六即位について台当の異目を明らかし、当宗の成仏は六即一即  
の名字位の下種即成にあることを釈したもので、この抄は幕末の皆成・久遠論争に於て阿派共に盛ん

に引用して各々火花を散らしたものである。

と述べ、大平宏龍先生は、

日蓮義に於いては、すべて南無妙法蓮華經の信行課程として六即を見る立場である<sup>(1)</sup>

と解説されました、

内容的に特に日像聖人の京都への初めての法華宗弘通を高く評価し、その門流の誇るべきことを強調しているのは、「六即私記」の成立時期の推測からして、諸門流の室町幕府諫暁の動きと関わりがあったのではないか<sup>(2)</sup>

と指摘されている。

### 13 自著の引用

自著の文言の引用は確認できないが、「総釈(六即の下)」第二紙から三紙において「四帖抄・二帖抄・名目見聞法華下」の書名が見える。

### 14 刊本

『皆久問題資料集』第五卷所収(謄写刷)、昭和八年(一九三三年)。

『門祖日隆聖人御聖教』所収、本門仏立宗刊、平成二五年(二〇一三年)。

『法華宗全書』日隆3所収、法華宗宗務院刊、平成三一年(二〇一九年)。

「六即私記」・「当家要伝」調査報告（株橋祐史）

六即私記 「六即下」

紙 行数	紙 行数	継目文字右	継目文字左	紙背	貼紙	備考
17	1	継目文字右	下「カ」	紙背	貼紙	備考
	2	下「カ」	下「モ」			
	3	下「モ」				
	4	中「六即下」	下「ト」			
	5		下「カ、」			
	6	下「カ、」	下「イ」		P・6・11①	
	7	下「イ」				
	8					
	9		下「い十」			私云
	10	下「い十」				
	11		上「ウ」			
	12	上「ウ」	下「カ」			
	13		下「サ」			
	14		下「ヒ」			奥書
	15					

「理即名字即下」

紙 行数	紙 行数	継目文字右	継目文字左	紙背	貼紙	備考
17	1	継目文字右	下「L」			備考
						理即下



22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2
17	6	17	18	19	19	9	20	19	9	18	19	17	17	4	19	17	19	20	16	15
	下「名」			下「内」		下「名」	下「ム」	中「名字下」	下「ト」	下「久」	下「木」	中「名字下」		下「一」		下「五」		下「ヲ」		
中「名字下」		下「名」		下「一ト」	下「内」		下「名」	下「ム」		下「ト」	下「久」	下「木」			下「一ト」	下「ト、」	下「五」		下「ヲ」	
																	P・5・10①			
															P・6・11②					
									中、後空白										名字即下	

37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23
11	19	20	18	19	12	17	18	4	17	18	17	18	18	15
	下「β」		下「t」	下「六」		中「ソ」下「ム」	上「カクヘシ〇」	下「ル」		下「〇」	中「父」	下「ホ」	中「手」	
	下「間」	下「β」	下「三」	下「t」	下「六」		中「ソ」下「ム」	上「カクヘシ〇」	下「ル」		下「〇」	中「父」	下「ホ」	中「手」
				P・6・11③										
								紙幅小						

「観行即下」

3	2	1	紙 行数
16	15	9	継目文字右
			継目文字左
下「マ」	下「二」	P・5・10②	紙背
			貼紙
		観行即下	備考

24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4
17	13	12	13	14	14	15	13	16	13	8	16	4	17	15	16	16	17	11	17	17
		下「シ	下「テ				下「以	下「ク		下「止			下「智			下「八				
中「ト	下「テ		下「シ	下「テ				下「以	下「ク		下「止		下「コ	下「智			下「八			下「イ
	究竟即下			分真即下	前半8行見せ消ち			折目	相似即下、折目											

26	25				
17	17	中「ト」	下「名」		
		下「名」			

二、「当家要伝」

- 1 通称 当家要伝。但し、隆師の命名ではなく、両山二八世日頭師の奥書き（『法華宗全書 日隆3』八〇頁）のように、頭師によってつけられたものである。
- 2 異称 なし
- 3 形態 卷子本。但し全紙に綴じ穴があり、もと閉本（縫本）であったことがわかる。奥付（同、参照）によると、頭師の貞享二年の修覆の際、裏打ちをした後、卷子本としたのである。
- 4 巻数 一卷
- 5 著作年 未詳。なお故株橋日涌先生は、永享八年（一四三六）より文安三年（一四四六）の間の著述の内に分類されている。また大平宏龍先生も、「筆跡は『私新抄』に類似、恐らく、隆師の初期の著述の一。」としている。<sup>7)</sup>
- 6 真蹟存否 真蹟存
- 7 法量 全体縦二八cm×横一〇四六cm。なお、『大本山本興寺 寺宝目録』（二六頁）は「二八・一×九八八」となっている。
- 8 自著の引用 なし

9 紙背文字 なし

10 文字写り 著述の際に出来たと思われる文字写りが2箇所認められる。

① 第二六紙 一三—一四行目「尋云」

② 第二七紙 八—九行目「三企」

11 内容 一、信解行証の事。二、三慧四智の事。三、神力囑累惣別付囑の事。四、一部八巻俱に下種と作る耶。五、本門寿量品の首題の事。六、首題と一念三千との不同の事。七、本迹の観心の事。以上の七箇条について隆師の考え方を示したもの。上記の標題中、「一部八巻俱作下種耶」は本文に論及されるが条箇(目次)にはあげていない。また条箇中「題名相對五時事」「於口唱題目有智者愚者不同事」「在世一期説教為滅後流通成序事」「正像二時為末法成序事」の標題が見せ消ちとなっており本文に論及がない。なお大平宏龍先生は、「本抄は隆師教学形成期に属するとみられ、その点注意が必要である。」とされている。<sup>8)</sup>

12 状態 解説に関わるほどではないが多少の虫食いがある。

13 刊本 『桂林学叢』第一五号別冊、平成二年(一九九〇年)一月

『法華宗全書』日隆3所収、法華宗宗務院刊、平成三二年(二〇一九年)。

### 当家要伝

7	紙		
15	行数	継目文字	貼紙
		正像地涌出現(左)	文字写り

